特集にあたって

第 20 期第 8 研究会代表者
菊　池　恵　介

植民地主義の歴史と現在
Colonialism Past and Present

本特集は，人文科学研究所第 20 期部門研究「現代レイシズムの批判的比較分析－植民地研究との融合を目指して」（2019～21 年度）の成果の一部であり，論考 4 本と研究ノート 1 本から成っている。次世代の研究者を養成するという研究会の目的の一つを反映し，執筆者は博士後期課程，もしくはポスト・ドクターなどの研究者で構成されている。これらの論文は，いずれも広義での植民地主義やレイシズムに関するものであるが，それは 2007 年より現在に至るまで本研究会で一貫して取り組んできたテーマでもある。この共同研究の一つの特徴は，国や地域を限定することなく，人類が経験してきた植民地主義の歴史とその影響について，さまざまな専門分野の研究者が議論を重ねてきた点にある。本特集でも，イギリス・フランス・日本・アメリカ等の多様な国々がインド・アフリカ・オセアニア・朝鮮・沖縄といった地域で展開した海外膨張や植民地支配などが考察の対象となっている。

近年，本研究班が特に重視しているのが，現代世界がどのように植民地主義の歴史とつながっているかという問いである。本特集の論文は，必ずしも過去・現在・未来の関係性や連続性を主題化しているわけではないが，全体として見ると，植民地主義の歴史のみならず，第二次大戦後から今日にいたる従属構造や制度的差別を扱っており，現代レイシズムに関心を抱く読者にも是非読んでいただきたい内容となっている。イギリス帝国のインド人と委任統治制度を扱う山田論文，仏領ニューカレドニアにおける移住型植民地主義を扱う友寄論文，日本統治下の朝鮮における「旅行証明書制度」を分析する呉仁済論文は，いずれも植民地期に焦点を当てた歴史研究である。一方，日本の朝鮮史研究者であった梶村秀樹による反差別運動を論じる大槻論文，沖縄における米軍基地への地域住民による抵抗運動を扱う桐山論文は，日本のポストコロニアルな課題を主題としている。

植民地主義とレイシズムという主題に関して，地域・国や時代を超えて，あるいは一見異なる文脈をつなぐ形で，何かしら示唆するものが導きだされることが，本特集の企画者の願いである。実際，いかなる論点に注目するかで，多様な読みが可能となるだろう。たとえば，「旅行証明書制度」を論じる呉仁済論文と，戦後日本の指紋押捺制度に触れる大槻論文を併せて読むことで，管理・監視という点において，植民地主義とポスト帝国期の民族差別の連続性が浮かび上がってくるだろう。また，山田論文，桐山論文は，支配・抑圧された人々に焦点を合わせている点で共通しており，脱植民地化のプロセスと「継続する植民地主義」の双方を考える上で，被抑圧者の＜主体性＞を描き出す重要性を示唆している。さらに，様々な植民地主義とそれへの抵抗が，ひとつの帝国の内部で完結しておらず，異なる帝国間の関係性に規定されてきた点も，近年の植民地研究において注目されるポイントである。この点で，ニューカレドニアへのフランスの流刑政策と明治期日本の移民政策を産業革命が生みだした都市下層民の「放逐の論理」として描き出す友寄論文と，諸帝国間の利害関係を調節する組織としての委任統治領を主題化する山田論文はともに示唆的であり，併せて読むことに意義があると考えられる。